

定性評価の仕組み構築に向けた取組状況について

1 経緯

- 「あきた文化振興ビジョン」の進行管理については、PDCAサイクルのマネジメント手法により、文化芸術に関する施策、事業、取組の達成状況を検証・評価し、その結果を次年度以降の施策等に反映させることとしている。
- 令和5年度第2回協議会（9/29開催）において、評価の方法について協議を行った結果、数値による指標達成状況（定量評価）に個別事業（公演、イベント等）の現場調査に基づく評価（定性評価）を加味し、総合評価を行う手法を検討することになった。
- 令和5年度第3回協議会（2/22開催）において、定性評価の仕組みの概案を示し（参考資料5－③～⑤）、令和6年度から具体的な取組を開始している。

2 今年度の取組

- 秋田大学地域連携プロジェクトゼミ（3名）を活用している。活動時期は、5月1日から11月末日までで、月に2回程度の打合せを行っている。
- 今年度の主な取組内容は、定性評価シート（案）の作成及び実際の事業における試行的活用である。

3 定性評価シート（案）【資料5－①】

- （1）どの事業にも対応できるように、汎用性の高い質問項目を設定する。
- （2）事業になじまない項目や評価が困難な項目については、「N」を記載する。
- （3）それぞれの事業で複数の者が評価をし、その平均値を評価とする。

4 課題及び検討事項

- （1）事業実施者（受託者）から事業報告がなされ、正式な評価が確定するまでには、相当な時間が必要である
- （2）事業の多くが8月以降にあること、事業の日程が学生の都合に合わず評価できなかったことなどにより、定性評価シート（案）を実際に使用する機会が少なかった。
今年度は、定性評価シートの作成を主な活動としており、評価自体は試行的に実施しているが、本格的に制度を運用する場合は、参加可能な学生をできるだけ多く確保する必要がある。
- （3）学生の知識や経験では評価困難な場合は、有識者による助言等により補填することを想定しているが、いつ、どのような方法で受けるのかを検討する必要がある。
（例）有識者が学生と共に事業に参加するのか、又は事後に学生からヒアリングを行い、助言をするのか。
- （4）定性評価を運用・維持をしていくには、事務局体制の整備が必要である。
（例）チームと県事業担当職員との調整や事業当日の指導を行う、県統括担当職員の配置。

5 今後の予定

[11月～12月]

秋田公立美術大学及び国際教養大学に説明を行い、学生参加に当たっての課題を洗い出す。

[1月～3月]

- ① 第2回推進協議会において、定性評価の取組状況の報告。
- ② 学生の参加に向けた準備など。